

# 農林水産商工常任委員会提出資料

(平成21年10月8日)

項 目	ページ
1 平成21年度「食のみやこ鳥取県フェスタ」について 【農政課】	1
2 主要農産物の生産販売状況について 【生産振興課】	2
3 ナラ枯れ被害の状況について 【森林・林業総室】	3
4 長雨・日照不足等による農作物への影響について 【農林総合研究所】	4
5 農林水産部の試験研究に係る外部評価の実施について 【農林総合研究所】	5
6 平成21年上半期における水産物の水揚状況について（速報値） 【水産課】	11

農 林 水 産 部

# 平成21年度「食のみやこ鳥取県フェスタ」について

平成21年10月8日  
農 政 課

県民の農林水産業に対する理解を深めるとともに、地域特産物及び地場産業の振興を促進することにより「食のみやこ鳥取県」を推進するため、「食のみやこ鳥取県フェスタ」を開催する。

(※今年度のフェスタは、「鳥取県農林水産祭」の時代から数えて48回目。)

なお、本年は「日本のまつり・2009鳥取」との連携開催。

## 1 展示会・即売会等

(1)日 時 10月10日(土) 午前10時から午後4時  
11日(日) 午前9時から午後3時

(2)内 容 県内で生産された農林水産物、地域特産物及びその他加工品等の展示、即売会など

## 2 場 所 コカ・コーラウエストスポーツパーク(鳥取県立布勢総合運動公園・県民体育館周辺)

## 3 主な催し内容 [場所:屋外]

区 分	内 容
啓発展示	<p>【鳥取県優秀経営農林水産業者等紹介コーナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>鳥取県優秀経営農林水産業者として知事表彰を受けた農林水産業者等の活躍の様子や功績等をパネルで紹介。</li> </ul> <p>【農林水産技術等普及啓発コーナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>県の試験研究機関における試験研究成果、農林漁業関係団体による啓発パネル等の展示等</li> </ul>
イベント	<p>【参加型イベントコーナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>木工教室等の参加型イベントを開催</li> </ul> <p>【ペット無料相談コーナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ペットの病気やしつけ方等に関する無料相談</li> </ul>
即 売 会	<p>【大地と海の恵みエリア】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農林水産業団体による農林水産物や加工品の紹介・販売</li> <li>農林水産業の普及・啓発のための体験イベント開催</li> </ul> <p>【鳥取の味エリア】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>鳥取県自慢の郷土料理や食材の展示、試食、販売</li> </ul> <p>【ふるさと自慢エリア】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地元グループによる名物料理、加工品等の販売</li> <li>食をはじめとした市町村のPR</li> </ul> <p>【宅配コーナー】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>会場内で購入した即売品の宅配サービスの受付</li> </ul>

### <共同開催イベント>

NHKとっとり放送局による「しっかり噛んで健康家族」

区 分	内 容
イベント	<ul style="list-style-type: none"> <li>チューイングコンテスト(歯と噛むことの大切さを啓発)</li> <li>アナログ放送終了の周知や番組PR</li> <li>NHKのキャラクターと一緒に撮影する記念写真コーナー</li> </ul>

## 4 主 催

食のみやこ鳥取県フェスタ実行委員会(会長:坂根國之JA鳥取県中央会会長)

構成機関:鳥取県、県市長会、県町村会、JA鳥取県中央会、JA鳥取信連、JA全農とっとり

JA共済連鳥取、NOSAI鳥取、県森連、県漁協など、20団体

# 主要農産物の生産販売状況について

平成21年10月8日  
生産振興課

## 1 水稻

### (1) 作柄概況

5月下旬から6月上旬にかけて及び7月中旬から下旬にかけての日照不足の影響で穂数が少なく、面積当たりの籾数は平年に比べてやや少なく（平年比95%）なった。また、登熟は平年並と見込まれるため、9月15日現在の作柄は「やや不良」で作況指数は「95」（中国四国農政局鳥取農政事務所）。

（10アール当たり）

区分	予想収量(kg)	平年収量(kg)	作況指数
鳥取県	490	514	95
中国地区	509	517	98
全国	521	530	98

### (2) 収穫・品質検査成績の状況

- 7月中旬～下旬の低温・日照不足により生育停滞し、収穫の開始が遅くなったため、収穫の進捗状況は45%と昨年（同期53%）よりやや遅れている（9月20日現在、生産振興課調べ）。
- 1等米比率は73%（昨年同期57%）。2等以下となったものの主な理由は、太りが不十分な粒や未熟な粒が多いこと（9月15日現在、中国四国農政局鳥取農政事務所）。

## 2 梨

### (1) 販売実績

8月25日から始まった二十世紀梨（露地）の販売は概ね終了した。

（平成21年9月21日現在）

項目	平成21年度		平成20年度		前年対比		備考
	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (t)	単価 (円/kg)	数量 (%)	単価 (%)	
二十世紀	7,299	222	6,566	243	111	91	貿易は除く
豊水	608	210	777	200	78	105	貿易は除く

※ 全農取扱数字による（格外品を含む）

### (2) 概況

- 今年の天候の影響で全体的に大玉となり、市場出荷も期間を通じて2L～3L中心の大玉で推移した。
- 景気低迷に加え、産地進物の需要も減退したため市場単価は昨年より低迷した。
- 貿易需要も円高等の影響から大きな盛り上がりがなく、結果として市場への大玉出荷が加速された。

# ナラ枯れ被害の状況について

平成21年10月8日  
森林・林業総室

## 1 ナラ枯れ被害の状況

ナラ枯れ被害は、カシノナガキクイムシ（体長5mm程度）が運ぶナラ菌によって、ナラ・カシなどの樹木が通水障害を起こし枯損するもの。

- (1) 今年度(8月末時点)の被害材積は2,727m<sup>3</sup>と、前年度より約5割増加。
- (2) 新たに、湯梨浜町と大山町で飛び火的に被害が確認され、県内8市町で被害が発生。
- (3) 年度別被害の状況

市町村名	平成19年度	平成20年度	平成21年度	対前年度比
鳥取市	(5,407本) 811.61m <sup>3</sup>	(5,126本) 1,188.04m <sup>3</sup>	(6,468本) 1,473.29m <sup>3</sup>	(126%) 124%
岩美町	(81本) 12.15m <sup>3</sup>	(204本) 30.60m <sup>3</sup>	(231本) 34.69m <sup>3</sup>	(113%) 113%
八頭町	(350本) 84.00m <sup>3</sup>	(190本) 62.00m <sup>3</sup>	(250本) 73.00m <sup>3</sup>	(132%) 118%
若桜町	(1,200本) 288.00m <sup>3</sup>	(1,550本) 458.00m <sup>3</sup>	(1,010本) 302.00m <sup>3</sup>	(65%) 66%
智頭町	(35本) 8.40m <sup>3</sup>	(160本) 52.00m <sup>3</sup>	(560本) 166.00m <sup>3</sup>	(350%) 319%
三朝町	(14本) 9.10m <sup>3</sup>	(134本) 87.10m <sup>3</sup>	(1,033本) 671.45m <sup>3</sup>	(771%) 771%
湯梨浜町	—	—	(3本) 1.95m <sup>3</sup>	—
大山町	—	—	(10本) 5.00m <sup>3</sup>	—
計	(7,087本) 1,213.26m <sup>3</sup>	(7,364本) 1,877.74m <sup>3</sup>	(9,565本) 2,727.38m <sup>3</sup>	(130%) 145%
鳥取県 「出合いの森」	(204本) 61.20m <sup>3</sup>	(40本) 12.00m <sup>3</sup>	(60本) 18.00m <sup>3</sup>	(150%) 150%

## 2 これまでの対応

- 7月から8月にかけて発生するナラ枯れの被害木調査を実施。
- これに基づいて、県が設置している「鳥取県ナラ枯れ被害対策協議会」において、鳥取森林管理署・鳥取県・関係市町村が連携して、被害木の駆除に取り組むことを確認。

## 3 今後の対応

- 被害先端区域である鳥取市（旧青谷町）、倉吉市、湯梨浜町、三朝町、大山町において、県がヘリコプターとGPSを活用して被害木の所在箇所を座標特定する被害木調査を実施し、徹底駆除を行う市町村を支援。

# 長雨・日照不足等による農作物への影響について

平成21年10月8日

農林総合研究所

長雨・日照不足等による主要農作物への影響（10月1日現在）は以下のとおりである。

## 1 水稻への影響

中山間地で、一部不稔や登熟停止が散見されたほか、登熟遅れが見られた。

全体的に軟弱に生育した影響で、倒伏しているほ場が例年に比べて多い。9月中旬までの収穫では、収量は平年よりやや少ないが、品質は比較的良好である。

葉いもちの上位発生はほとんどみられず、穂いもちの発生は少なかった。

（参考）9月15日現在の作況指数95「やや不良」（10a当たり予想収量490kg）

## 2 大豆への影響

播種作業が遅れ、8月播種となったほ場があった。全体的に莢の付きは少なく（山間部では1～2割減）、低収が見込まれる。

葉の枯れ（干ばつ害）や、作業遅れによる雑草の繁茂で、生育不良のほ場があった。

## 3 なしへの影響

県下全域的に、二十世紀の玉太りは良好だったが、糖度は低めに推移した。また、心配された水ナシ等の生理障害は少なかった。山間部の一部地域で、二十世紀の果面障害（アザ）が多かった他、変形果の多い地域も一部にあった。

病害虫では、一部で黒星病が多発した他、黒斑病の被害が増えた園も散見された。

## 4 白ねぎへの影響

全般的には、軟弱傾向ではあるが、比較的良好な生育の地域が多かった。しかし、西部地域では出荷物の首部の締まりが不良傾向であったり、海岸部の排水不良ほ場で、根痛みによる欠株の発生が見られた。また、中部地域では、葉折れの発生が多かった。

病害虫では、低温の影響でべと病やさび病が多く、根痛みから来る軟腐病が増加傾向だった。

## 5 花き類への影響

生育遅れにより、シンテッポウユリ等で盆前出荷に間に合わないものが見られた。

抑制シンテッポウユリは、全体的に良好な生育をしており、花壇用苗のストック、パンジー、ビオラも発芽及び生育が良好である。

## 6 飼料作物への影響

飼料用トウモロコシは、全体的に生育不良で、収量が前年比で2割から3割減となっており、中には半減のほ場が出るなど、低収傾向となった。

夏牧草類は、7月中旬以降の収穫作業が進まず、収穫遅延や雑草混入による品質低下につながっている。

飼料用稲は、やや減収となるものの、品質低下はない見込み。

# 農林水産部の試験研究に係る外部評価の実施について

平成21年10月8日  
農林総合研究所

平成21年9月7日及び9日に農林総合研究所（北栄町由良宿）で実施した農林水産部の試験研究に係る外部評価の概要報告。

## 1 目的

農林水産部試験研究機関の試験研究課題について、多角的・客観的視点からの試験研究課題の選定、試験研究の効率的な実施及び広範囲に普及可能な技術等の確立を図ることを目的に、外部評価委員による評価を実施。

## 2 実施方法

各試験研究機関ごとに、来年度から取り組もうとする研究課題（事前評価対象）及び3年以上に亘る研究課題で本年度が中間年のもの（中間評価対象）について概要説明と質疑応答を行い、外部評価委員1人ひとりが、評価項目（事前評価：5項目、中間評価：4項目）について、5段階評価を行った。

各外部評価委員の評価の総合点の平均値により、判定を行った。

区分	評価項目	平均値	判定
事前評価 (25点)	・研究ニーズ、受益者は明確か	20点以上	◎ 研究を実施する
	・緊急性・公共性・公益性はあるか	15点以上	○ 研究内容・方法を見直して実施する
	・研究計画・目標は整理されているか	20点未満	○ 研究内容・方法を見直して実施する
	・消費者・生産者への効果が期待できるか	15点未満	× 実施を見合わせる
中間評価 (20点)	・知財の取得や普及・活用の可能性はあるか	15点未満	× 実施を見合わせる
	・社会変化等により継続の必要性が薄れていないか	16点以上	◎ 研究を継続する
	・計画どおり進捗しているか	12点以上	○ 研究内容・方法を見直して継続する
	・期待した目標の達成が見込めるか	16点未満	○ 研究内容・方法を見直して継続する
	・消費者・生産者への効果が引き続き期待できるか	12点未満	× 研究を中止する

・委員11名中、出席委員は次の10名の方。

区分	職業等	氏名
学識経験者	鳥取大学理事・(研究・国際交流担当)副学長	岩崎 正美
	(独)鳥取県産業技術センター理事長	稲永 忍
流通・経済界	(株)米子青果代表取締役社長	上田 博久
消費者	作家	松本 薫
	NPO 法人ナルク鳥取事務局長	金田 倫子
生産者	畜産農家	高力 房枝
	稲作農家	田中 正保
	(株)サカモト専務	坂本トヨ子
	種苗農家	秋田 愛子
	(社)境港水産振興協会顧問	米村 健治

## 3 評価結果の概要

区分	判定						合計
	事前評価			中間評価			
	◎	○	×	◎	○	×	
農業試験場	1	1		1	1		2
園芸試験場	3	3		6	1	5	9
畜産試験場	1	1		4		4	5
中小家畜試験場	2	1	1				2
林業試験場	5	4	1	4	1	3	9
水産試験場	3	2	1	3	1	2	6
企画総務部	1		1				1
課題数合計	16	3	11	2	18	4	34

※ 各試験研究課題の概要と評価結果は別紙のとおり。

## 4 その他

今回の外部評価の結果を踏まえ、来年度の予算要求を行う。

農林水産部試験研究機関の試験研究に係る外部評価結果（平成21年9月実施）

農業試験場		※ 評価結果の評点は各外部評価委員の評点の平均値で、判定は平均値による判定です。			
課題名	実施年度	内 容		評価結果	
事前1	水環境を守る肥料の低投入・低流出稲作技術の開発	H22~25	水稲作において、リン酸肥料の低減および窒素やリン酸などの富栄養化物質の河川への流出低減技術を確立し、環境保全型農業の推進に資するため、①リン酸投入量の低減化技術の確立、②無代かき栽培等による河川への流出抑制技術の確立、③水草を含む堆肥の有効利用検討を行う。		評点 16.3
		委員の意見	説明不足。水質汚濁の原因が水稲にあるとしたなら、水田面積が増えたのか、肥料の使用料は増えたのか、等の農業が原因と類推するに足るデータは存在するのか？ 環境にやさしい農業を目指すのはよいことだが、湖山池と結びつける必要はない。リン酸の問題は重要だが、研究目的の立て方、締め方に疑問がある。		判定 ○
中間1	水稲有機栽培技術の調査・技術確立事業	H20~22	有機農産物の栽培面積の拡大を着実に図るには、鳥取の風土に適した水稲有機栽培技術を確立することが急務であり、①実践農家技術を調査・検証し有効な技術や問題点を抽出、②収量や食味に大きく影響を与える有機質肥料（鶏糞など）の施用方法を明確化、等の課題に取り組んだところこれまでに有機栽培農家の収量実態と主な制限要因、有機質肥料の肥効特性等が明らかとなった。		評点 16.0
		委員の意見	有機栽培農家を中心に実証試験し、議論を深めることが必要。（A: そのスタンスで臨んでいる。）		判定 ◎

園芸試験場					
課題名	実施年度	内 容		評価結果	
事前1	有機・特別栽培拡大に必須の病害虫防除技術の確立	H22~25	安全・安心な農産物に対する消費者のニーズは高いが、化学農薬に替わる防除対策の確立が不十分なため、果樹・野菜における有機・特別栽培農産物の生産量は伸び悩んでいる。そこで、本県特産果樹・野菜において、温湯消毒、天敵、微生物農薬、黄色LED等を用いた病害虫防除対策の確立を行う。		評点 15.3
		委員の意見	テーマが多すぎる。作目、ブランド化に焦点を当てると、効果が具体的に示せるのでは。 どの品目を中心に置いて有機栽培をやるのか、最初に組み立てておかないと何のためにやるのか分からなくなる。		判定 ○
事前2	気象、土壌環境の変化に即した黒ボク畑特産野菜の安定生産技術の確立	H22~25	県内の黒ボク畑地帯は本県の特産野菜の主要生産地域であるが、地球温暖化に伴う夏期の高温化による生産不安定や肥料高騰による生産コスト上昇などの新たな問題が生じている。このため、スイカ、ブロッコリーやハウススイカ後作のミニトマト、ホウレンソウなどの高温期の生産安定、施肥削減のための土壌診断技術確立による生産コストの削減を図る。		評点 17.1
		委員の意見	高温期の生産安定が目的だが、高地では従来から高温期に出荷している。それに対抗できるのか、勝てるのか。		判定 ○
事前3	EOD反応を活用した花き類の鳥取型栽培技術の確立	H22~25	植物が日没直後(EOD=End of Day)に温度や光に敏感に反応することが明らかになり、日没直後、3時間程度の加温や光照射で生育・開花する事が園研の研究で明らかになった。 この生理を応用し、県内主力切り花のキク、ストック、抑制シンテツポウユリや各種の花壇苗について、従来、暖房等のコストがかかって栽培できなかった冬期から春先の、省エネ・低コストの新しい栽培法を確立する。		評点 17.7
		委員の意見	栽培期間の短縮になり、生産者のメリットが大きいと期待できる。 普及性について、大いに研究、問題化して欲しい。		判定 ○
中間1	「美味しいトマト」生産のための総合管理技術の確立	H19~22	糖度が高く美味しいトマト、ミニトマト生産のため、トマト産地における土壌水分管理と糖度の関連性解明、ミニトマトの品種選定や整枝方法を検討した。 土壌水分管理と糖度の関連性は技術開発よりも産地の技術平準化が必要と考えられた。ミニトマトは側枝を利用して葉枚数を増加させることで糖度がやや上昇した。また、糖度が高く、収量も得られる有望な品種があった。		評点 13.6
		委員の意見	ミニトマトは劣化が著しい。美味しいも大切だが、劣化対策が先では。（A: 劣化対策は難しい課題。）		判定 ○
中間2	イチゴの品質安定技術の確立	H19~22	本県の冬季寡日照条件下でも十分な収量・品質が得られる品種の選定や現在の県内主流品種の「章姫」の品質安定技術を検討した。 これまでの試験で「紅ほっぺ」が本県での適応性が高く有望であり、「章姫」はケイ酸の施用や植物調節剤の利用で品質安定できることが分かった。		評点 14.1
		委員の意見	旬の時期に安くて美味しいイチゴが欲しい。イチゴに限らず、多様なニーズに対応しよう傾向が強すぎないか。 メーカー、他機関のノウハウで十分では。		判定 ○
中間3	新しい販売チャンネルに対応した白ねぎ栽培体系の確立	H20~22	食の安全・安心に対する意識が高まる中、加工・業務用白ネギおよび特別栽培白ネギの栽培技術を確立し、販売チャンネルの増加と農家収入の安定化を目指す。 加工・業務用白ネギでは、栽植密度の変更により約2割の増収が見込まれるとともに、出荷規格に沿った作業形態により、土寄せ・調製作業の約6割の省力化が見込まれる。また、特別栽培白ネギでは、クリムソクローバーを用いた施肥体系により従来の施肥体系と同等の収量が得られ、肥料コストの低減が図られる。		評点 13.4
		委員の意見	余りに研究経費が少ないのでは。普及を目指した栽培技術マニュアルまでの作成を視野に。 業務用栽培のみでは経営が難しいのが現状。		判定 ○

園芸試験場(続き)		課題名	実施年度	内容	評価結果	
中間4	バイテックによるナンシ新品種シリーズの育成	H19~23	<p>極早生、自家和合性で病気に強くおいしい本県オリジナル品種の開発が求められている。また、白紋羽病に強い台木の開発が求められている。そこで、バイテック手法を用い、ナンシ新品種の育成を図る。</p> <p>現在、遺伝子診断により選抜した自家和合性系統の中から、果実品質に優れる系統の選抜を進めている。また、台木では、病原菌接種による耐病性系統の選抜を進め、病気に強いと思われる3系統を選抜した。</p>	評点	14.7	
				判定	○	
委員の意見		生産者の期待が大きいのと思うので、是非成果を出して欲しい。				
		梨という果物に対する消費者の嗜好が減ってきているのでは。				
中間5	バイテックによる花きニューアイテムの開発	H19~23	<p>リンドウでは、需要期の益から彼岸に開花し、頂花咲き性・日持ち性に優れる高品質な品種育成を目指し、現地優良系統から交配親候補を選定・育成中。シンテッポウユリでは、9月中旬~10月中旬に開花し品質に優れる雑種3系統を選抜した。</p> <p>また、シンテッポウユリとヒメユリとの交雑種を育成し、花の形状に優れる12系統を選抜した。</p>	評点	15.1	
				判定	○	
委員の意見		以前品種登録出願したプリティルピーン(観賞用のラッキョウ花)の市場評価は?(A:先日品種登録になり、大阪市場に出している。中心となる花ではなく、補完的な品種。)				
中間6	バイテックによるナガイモ、ラッキョウの新品種育成	H17~26	<p>砂丘地農業の再生・振興を図るため、省力栽培に適した高品質なナガイモ・ラッキョウの新品種の育成を目指す。</p> <p>ナガイモでは、ねばりっ娘と品質が同等以上で、切り芋栽培に適した品種育成を目指し、有望な1系統を選抜した。ラッキョウでは、乾腐病に強く、収量・品質に優れる新品種の育成を目指し、交配を繰り返して、乾腐病に非常に強い4系統を選抜した。</p>	評点	16.3	
				判定	◎	
委員の意見		デガイモもラッキョウも鳥取県にとって大きな作物。継続して研究を進めて欲しい。				
		ねばりっこはトロゴ飯には不向き。どのような戦略を持っているか?(A:ねばりっこと長いもの中間を市場が求めているかどうか、今後の課題。)				

畜産試験場		課題名	実施年度	内容	評価結果	
事前1	牛受精卵採取成績の向上	H22~24	<p>牛受精卵の採取において、正常卵の少ない牛「成績不良牛」が採卵実施牛の約4割、更に採卵すら実施できない「低反応牛」が全体の2割程度も存在し、これが優良受精卵を確保することへの障害及び優良牛への改良増殖の問題点となっている。この対策技術の開発が農家から強く要望されている。この技術開発により、優良牛の増加、育種改良の促進、及び高品質牛肉の供給拡大等の効果が期待できる。</p>	評点	17.8	
				判定	○	
委員の意見		抗酸化物質が卵子発育促進等に効果があるとの文献はあるのか?(A:ストレスに効果があるとの文献がある。))それだけの根拠で実験して大丈夫か?				
		効果について不確かなところがあるが、生産者のニーズは大きいのでは。				
中間1	ガラス化保存による牛性別別胚の簡易融解技術の確立(H19~21事業の延長継続)	H19~22	<p>性別別胚は、現在ガラス化で保存されるが、現場で簡易融解が出来ないため、現場で融解出来る方法が求められている。試験の進行がガラス化の条件の決定段階で遅れたため、当初計画期間のH21年度まででは、農家にガラス化性別別胚の簡易融解を広く実証展示し普及させられない。平成22年度まで延長し、酪農における雌の更新用育成牛の効率的生産、及び低ランク胚の利用による優良和牛の生産増加の促進を図る。</p>	評点	14.5	
				判定	○	
委員の意見		コストも考慮し、真に有効かどうかを検討する必要がある。				
中間2	粗飼料重視型経営システム試験	H18~22	<p>和牛繁殖経営で転作飼料稲を活用した経営への転換が進みつつある。そこで繁殖和牛・育成雌牛・子牛へ放牧と飼料稲を組み合わせる技術及び肥育についても試験を実施している。この技術により、和牛繁殖経営の粗飼料自給率を100%に近づけ、コストを低減し、さらに耕作放棄地の解消、地域の景観・環境保全に貢献できる。</p>	評点	15.9	
				判定	○	
委員の意見		経営システム試験というなら、畜産、農業、コストなどの色々な分野からの考察が必要。農試等との協働作業として組み立てる必要がある。				
		この技術は既に常識では?放牧との関係を見るのなら、水田農家と直接連携しないと実質的なデータが取れない。				
中間3	鳥取和牛うまみ開発試験	H17~24	<p>牛肉のおいしさに関わるオレイン酸、遊離アミノ酸に影響を与える要因を調査。それらの改良効果を持つ種雄牛を造成し、うまみのある鳥取和牛肉(ブランド化)生産を図る。①オレイン酸割合は雌が高く、と畜月齢が長いほど高い傾向にあり、種雄牛の影響力が大きいことを確認。②遊離アミノ酸はロース芯面積、BMSと負の相関、オレイン酸含量と無相関を示した。③オレイン酸割合及びグルタミン酸含量は鳥取系(気高系)血量が多くなると高くなる傾向を示し、両者に好ましい影響を与えていることが示唆された。</p>	評点	12.4	
				判定	○	
委員の意見		成分試験が先行し、今後、食味試験というのは逆では。オレイン酸と美味しさとは関係ありませんでしたでは、長年の試験が無駄になる。				
中間4	自給飼料生産拡大試験	H20~22	<p>トウモロコシ(自給飼料)の多収穫技術及び搾乳牛への多給与技術に関する技術を確立し、酪農家の飼料費低減を図る。トウモロコシサイレージを飼料乾物中30%割合で混合、給与した結果、牛の健康に問題はなく、繁殖成績を加味した収益性は当場の慣行法(一般の農家に準ずる)とほぼ同等であった。今後は、さらに自給飼料の割合を増やし、飼料費低減を進める。</p>	評点	15.4	
				判定	○	
委員の意見		トウモロコシの飼料は確立されている。何を調べるのか?(A:自給粗飼料で、地域循環型の飼料。40%という高率のものがない。)				



中小家畜試験場		課題名	実施年度	内容	評価結果	
事前1	鳥取県産オリジナル高品質豚開発試験	H22~25	鳥取県のオリジナルなブランド豚育成の強い要望が、飲食店、食肉小売業者等を中心として出された。そのため、高品質でかつ鳥取県オリジナルの豚の開発を目指して、21年度に中小家畜試験場で造成が完了するデュロック種(大山赤ぶた)雌と黒豚雄との交配種を作るため、黒豚の系統造成等を行う。	評点	21.0	
		委員の意見	もっとお金をかけてもよい研究だと思う。 東京XとDB種の成分、味の比較表は作っていないのか?(A:ない。東京Xは、キンカトンとB種と白ぶたの混合で、世代が進む品質が悪くなる。)	判定	◎	
事前2	天敵を利用したイエバエ防除試験	H22~24	畜産施設での、イエバエの発生が散見される。この防除には、主として薬剤が用いられるが、薬剤購入経費が高額でかつ根絶が困難である。このため、環境にも優しくかつ薬剤購入経費の削減を図ることが可能な、ガイマイゴミムシダマシ等のイエバエの天敵昆虫を用いた駆除方法の確立試験を行う。	評点	19.6	
		委員の意見	さっきのDB種は系統によるブランド化だが、生産方法によるブランド化(農業・薬品)けではない(清環境負荷の少ない畜産)を考えてみてはどうか。	判定	○	

林業試験場		課題名	実施年度	内容	評価結果	
事前1	海岸砂地用ツリーシェルターの開発	H22~24	松くい虫被害を受けた海岸林で、抵抗性クロマツが部分補植されている。飛砂や飛塩の対策にツリーシェルターが使用される現場が多いが、夏季の高温で植栽木が大量枯死する被害が各地で生じた。よって、海岸砂地における夏冬両方の厳しい気象条件から苗木を守るための、新たなツリーシェルターを開発する。	評点	14.4	
		委員の意見	苗木の大きいものは、別に解決策がありそう。シェルター以外の方法はないのか要検討。	判定	×	
事前2	付加価値の高い緑化苗木の効率的生産技術の開発	H22~24	緑化木のうちクロガネモチなど「実のなる木」の苗木段階での雌雄判別法、ドングリ類のうち発芽に長期間を要するシラカンなどの発芽促進技術を開発することにより、消費者の求める苗木の効率的な生産技術を開発する。	評点	18.2	
		委員の意見	工程表がない。3年かける試験なのだから、毎年度の目標がなければ、進捗状況の管理や中途の評価ができない。	判定	○	
事前3	スギ人工林の品質向上に関する施業技術の確立	H22~24	「品質が良く耐久性に優れる」という消費者ニーズを満たすには、県産スギ材の付加価値を高める必要がある。そこで、①心材促進化、②材質安定化の2点について課題を解決する。5年間の研究により、耐久性と材質性能が共に優れる全国で例を見ないスギ良質材の生産供給の実現を研究成果としたい。	評点	19.2	
		委員の意見	出荷まで後30年も40年もかかる材を使って5年間ほど研究して、成果が得られるのか疑問。	判定	○	
事前4	県産材の住宅内装用床材としての性能評価とデータベース化	H22~24	ヒトが居住空間で木のよさを体感できる「床材」に着目し、県産材の住宅内装用床材に関する各種性能の評価を行う。これにより、設計者が使いやすく消費者にも訴求できる「県産内装床材の性能データベース」を構築する。	評点	18.2	
		委員の意見	論旨の構成が理解できない。外材より杉が良いというデータが得られたとしても、鳥取県の杉が良いということにはならない。(A:鳥取県の材について先駆的にデータを示し、使い方の提案をしていきたい。)要するに、鳥取県産材の付加価値としてデータを提供するということが。	判定	○	
事前5	低コスト・高品質な高温乾燥材生産技術の確立	H22~24	木材の乾燥法として鳥取県内でも取組が進みつつある高温乾燥について、人工乾燥前の木材の「水分」に着目し、現場で実施しやすい2種類の前処理(天然乾燥、散水)方法で初期含水率のバラツキの軽減をさせる。それぞれの方法について、乾燥期間短縮での低コスト化や、表面割れの抑制による高品質化について検討し、従来よりも割れの程度が良好な「低コスト・高品質」乾燥材生産技術の確立を目指す。	評点	16.4	
		委員の意見	乾燥度&ひび割れ発生率の現状と目標数値を提示して、研究目標を明確にされたい。 どれだけニーズがあるのか、消費者にはピンと来ないテーマ。 本県の乾燥技術は全国的に遅れている。県全体の乾燥材に対する意識が高まるのが急がれる。	判定	○	
中間1	作業道盛土の簡易な検査手法の開発	H20~22	作業道盛土の検査手法の開発として、既存の貫入試験機をモデルとし、簡易な検査機器の開発を行った。この試作された機器を用いてさまざまな条件下で調査を行い、検査方法として、相対検査値法を考案、実証調査を行った。	評点	15.2	
委員の意見	土木関係の組織と連携すれば、よりスピーディにより良いものができるのではないかと。	判定	○			
中間2	カシノナガキクイムシによるナラ類集積回枯損被害軽減法の開発	H20~22	被害が拡大傾向にあるナラ類集積回枯損について、簡易な被害軽減法として粘着剤散布塗布試験、樹幹注入試験をいった。その結果、粘着剤については約1ヶ月間被害防止効果があることがわかった。また、この中で粘着剤のみでも被害防止効果があることが示唆された。カシノナガキクイムシの成虫発生は被害木の日照の違い、また標高でも発生時期が異なることが明らかになり、被害予防のためには1ヶ月以上の予防期間が必要であることがわかった。	評点	15.8	
		委員の意見	若木より成長した木が、より被害を受けるという説明だが、だとしたら自然の摂理であり、重要視することではないのではないかと。 温暖化になるともっと深刻化すると思うので、研究を進めて欲しい。	判定	○	

林業試験場(続き)		課題名	実施年度	内容	評価結果	
中間3	高性能林業機械を活用した低コスト伐出作業方法の確立	H20~22	委員の意見	高性能林業機械を活用した伐採搬出作業について、鳥取県におけるモデル的な搬出システムを想定し、各工程についての作業工程調査を行った。調査した各工程を組み立てシステム生産性の試算を行った結果、チェーンソー伐採、グラブ集材、プロセッサ造材、フォワーダ運材で9.31㎡となった。しかし、各工程の調査結果が大きくバラツキ、自然条件、人的条件を加味した調査が必要であることが明らかになった。	評点	16.2
				CO2の問題、外材の輸入減等、林業振興の3回目のチャンスと言われる状況下、林業の機械化について関係団体・組織の意識改革が必要。	判定	◎
中間4	県産針葉樹資源による構造用単板積層材の品質安定化技術の確立	H20~22	委員の意見	鳥取県産針葉樹資源の新しい活用方法として期待される構造用単板積層材(LVL)の品質安定化技術の確立を目指す。原木、単板の各段階における材質を調査し、各データの蓄積を行った。また実際にLVLを作製して曲げ試験を行い、曲げヤング係数、曲げ強さ共に、JASの曲げ性能を十分に満たす良好な結果であることがわかった。これら成果は、(株)オロチ(鳥取県日南町)でのスギLVLのJAS取得に貢献した。	評点	15.0
				間伐材を利用しているとのことだが、買付価格が低く、林業農家は「他に売った方がよい」と言っているとも聞いている。 間伐材の利活用という点、雇用に繋がる研究という点で大いに期待。	判定	○

水産試験場		課題名	実施年度	内容	評価結果	
事前1	沿岸潮流情報発信実用化事業	H22~23	委員の意見	漁業者は漁場の潮流が事前にわからず、出漁しても潮流が早く操業出来ないことが多くあり、出漁前に潮流情報の提供が望まれている。このため既存の沖合潮流予測モデルを沿岸モデルへの転用を検討したが困難。そこで冬季風浪に耐えられ周年設置が可能な小型で安価な新型パイを開発し、漁場に設置し、パイの安全性、データ安定的収集と受信の確認を行うとともに、各種方式漁業者へ情報提供を行う。	評点	22.8
				パイの価格と数量は？(A:1千万円台にしたい。まず1基。実験後は3基を予定。) 実験中に2基必要ではないか。	判定	◎
事前2	美保湾カタクチイワシ調査	H22~24	委員の意見	県西部の美保湾ではカタクチイワシを対象とした船曳網やすくい網漁業者が多く、またこれを原料とする煮干し加工業も発達し、境港は全国有数の煮干し産地となっている。しかし、近年シ漁獲変動が大きく漁業者は計画的な操業ができず、加工業者も原料調達に不安定となっており、境港特産品が消滅しつつある。このため美保湾におけるカタクチイワシの漁場形成機構を明らかとし、漁況予測モデルを開発する。	評点	19.7
				重要な研究だと思う。先行県の茨城は水流を原因と結論づけたようだが、予測モデルはどのようなものを考えているか？(A:日本海の冷水の流れが主要因と予測し観察する予定。各県の海洋観測データなどを集積する。)	判定	○
事前3	美保湾栽培漁業実用化支援調査	H22~23	委員の意見	美保湾で平成22年度から新たに実用化対象種となるパイと、実用化まであと一步のヒラメについて、美保湾の漁業者と協働しながら、種苗放流、漁場管理及び資源管理を含めた増殖策等を検討する。 この調査結果から、パイについては実用化対象種の定着及び、現在、策定中の資源回復計画の着実な実行に向けた支援を行い、ヒラメについては全国豊かな海づくり大会が開催される平成23年度に事業放流の再開を目指す。	評点	20.0
中間1	海の美味しさ発見事業(鳥取県水産資源の科学的解析によるブランド化)	H20~22	委員の意見	鳥取県産魚の美味しさを科学的に説明し、また沖合底曳網で漁獲される未利用資源の有効利用に必要な成分分析を行った。ハタハタ・サワラについては美味しさの指標である脂ののりを月別に調査。ハタハタは大型個体程脂のりブランド化に適し、サワラは瀬戸内産と遜色がないことが分かった。また、ノロゲンゲ(ドギ)には、ヒアルロン酸がアジの37倍、コンドロイチン硫酸が2.1倍も多量に含んでいることが分かった。	評点	16.3
				秋田のハタハタとの違いは？(A:秋田産は、産卵後に沿岸で捕漁。大きいのが油分が少ない。鳥取産は小さいが油分が多く美味い。)	判定	◎
中間2	新魚種種苗生産技術開発試験	H20~22	委員の意見	単価が高く、移動が少ないキジハタ資源を増やすため、放流種苗を大量生産する技術を確立する。 先進県、国の研究機関から情報収集・技術習得するとともに、沿岸漁業部の施設で種苗生産試験を行い、初年度の20年度は約4千尾の生産に留まったが、種苗生産技術の改良に取り組んだ結果、21年度は50t水槽を用いて約9万尾の種苗生産に成功した。	評点	15.7
				高級魚なら、他県でも取り組んでいるのではないかと？(多くの県で取り組んでいる。山口、愛媛が先行。) 県で栽培方法を確立した後の展開はどうなるのか？(A:漁業者で事業化。市町村の補助も考えられる。放流は県でやるということも考えられる。)	判定	○
中間3	地域養殖特産種創出試験	H20~22	委員の意見	淡水魚養殖の可能性を広げるため、希少価値の高いアユカケの養殖技術を確立する。 天神川、勝部川等で採取した個体を用い、採卵、飼育試験を沿岸漁業部の施設で行なっている。これまでに、搾出による人工採卵が水カビ対策には有効であることが判った。ふ化仔魚は全長約5mmと大きく、飼育は容易と思われる。	評点	13.7
				知られていない魚。淡水魚は美味しくないと思っているが、市場評価はどうか？(福井県(天然記念物に指定)では非常に珍重されている。) 10年程前に本モロコが話題になったが、今回第2弾か？(A:本モロコは全国一の養殖業者は鳥取県にある。アユカケの方が美味しい。)	判定	○

企画総務部					
課題名		実施年度	内容		
事前1	将来の農林業に向けた地球温暖化対応試験研究プロジェクト事業	H22～26	気候変動に関する政府間パネルの4次報告によると、今世紀末の地球の気温は今よりも2～3度上昇することが予想される。そこで、中長期的視野に立った試験研究が必要。	評点	13.9
			試験研究内容 ①本県主要農産物の西南暖地での生育状況や先進試験研究機関の取組みの調査 ②常緑果樹の試験栽培 ③温暖下でのスギ、ヒノキの発育調査 ④温暖化による少花粉スギ、ヒノキの花粉形成量の影響把握	判定	×
		委員の意見	具体性が乏しく、イメージがわきにくい。 調査を行うのはよいが、戦略が立っていないのに試験栽培の実施は尚早。 みかんで愛媛などに勝てるとは思えない。付加価値の高い新品目を求めて、海外(フィリピン等)に調査に行くべき。		

# 平成21年上半期における水産物の水揚状況について(速報値)

平成21年10月8日  
水産課

## 1 県内漁協の水揚状況(1月～6月)

漁獲量は6,993トンで前年同期に比べ8%減少した。一方、漁獲金額は3,274百万円で9%減少した。  
内訳は、

- ・沖合底曳網は、アカガレイが1,100トンで前年同期に比べ20%増加したが、ズワイガニが298トンで29%減少、ハタハタが998トンで56%減少した。
- ・沖合いか釣は、スルメイカが1,448トンで37%増加した。
- ・沿岸漁業は、ハマチが405トンで22%増加、アジ類が353トンで64%増加したが、サワラが69トンで61%減少、スルメイカが109トンで54%減少した。

(単位:トン、百万円)

区 分	漁 獲 量		対前年比 (%)	対前年 増 減	主 要 魚 種
	21年(上期)	20年(上期)			
沖合底曳網漁業	3,515	4,403	80	-888	ズワイガニ、ハタハタ、 アカガレイ
	1,732	2,083	83	-351	
沖合いか釣漁業	1,550	1,073	145	477	スルメイカ
	641	478	134	163	
沿 岸 漁 業	1,928	2,101	92	-173	ハマチ、サワラ、スルメ イカ、アジ類
	901	1,030	88	-129	
合 計	6,993	7,577	92	-584	
	3,274	3,591	91	-317	

(注) 上段は漁獲量、下段は漁獲金額。

(水産課調べ)

## 2 境港の水揚状況(1月～6月)

漁獲量は54,303トンで前年同期に比べ、アジやサバなどの漁獲増により1%増加した。一方、漁獲金額は8,009百万円で29%減少した。

(単位:トン)

区 分	21年(上期)	20年(上期)	対前年比(%)	対前年増減
ア ジ	16,276	14,642	111.2%	1634
サ バ	9,862	2,492	395.7%	7370
マ イ ワ シ	869	4,007	21.7%	-3138
ウ ル メ イ ワ シ	2,815	1,297	217.0%	1518
カ タ ク チ イ ワ シ	9,757	14,138	69.0%	-4381
イ カ 類	892	2,192	40.7%	-1300
ベ ニ ズ ワ イ ガ ニ	5,494	5,753	95.5%	-259
そ の 他	8,338	9,154	91.1%	-813
水 揚 量 合 計	54,303	53,671	101.2%	632
金 額 ( 百 万 円 )	8,009	11,230	70.9%	-3291

(資料:(社)境港水産振興協会)

## 3 クロマグロの水揚状況(6月～8月)

クロマグロの水揚実績(6月6日～8月21日)は、水揚本数16,515本(前年比37.1%)、漁獲量878トン(前年比39.4%)、漁獲金額1,101百万円(前年比36.3%)となった。

区 分	21年	20年	対前年比	対前年増減
漁獲量(トン)	878	2,228	39.4%	-1,350
水揚本数	16,515	44,502	37.1%	-27,987
金額(百万円)	1,101	3,033	36.3%	-1,932